

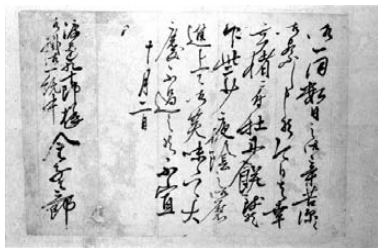
「上山城」からのたより 錦秋・第77便

部下の褒め方

司が成果をあげた部下を褒め、そして、褒められた部下は益々仕事に励む。上司としては、そう思いたいところですが、褒め方次第ではかえって部下のやる気を低下させてしまうこともあるでしょう。では、どうすればそういった事態を回避できるのか？今回は、その回避方法の一例を、次に提示する。幕末の上山藩の中心人物、金子与三郎が同藩士渡邊九十郎らに出した書状（年不明十月二日付）から見ていきたいと思えます。

【書状原文】御一同数日の御辛苦深く御察し申候今日者幸玄猪二付牡丹餅致候乍些少夜陰之御慰進上候御笑味候ハ、大慶不過之候不宜（現代語訳皆様方、数日間のお勤め御苦勞様。本日は玄猪の節句につき牡丹餅を作りました。少しばかりお分けますので、どうぞお召し上がりください。）

この書状は、数日に



渡邊九十郎他宛金子与三郎書状
(會田庄一氏所蔵)

【常設展示室より】今月から第三展示室に一八二四（文政七）年発生の申の洪水関係史料を展示します。

渡る任務を終えた渡邊らを慰勞すべく差出されたものとなります。この書状を読んで筆者が思わず感心してしまつたことは、金子が勞をねぎらう品（牡丹餅）を、玄猪の節句（旧曆十月亥の日亥の刻に餅を食べる風習）にあわせ贈つていたことです。なぜなら、もし金子が渡邊らの慰勞のためだけに牡丹餅を作り贈つたとすれば、渡邊らは恐縮する、または、「何だか恩着せがましいな」と反感を持つてしまうかもしれません。しかし、勤めをねぎらう言葉をかけつても、あくまで牡丹餅は玄猪の節句のために作つたものであることで、渡邊らはより氣楽に味わうことができ、それにより、勤めでたまつた疲れも癒やすことができ、きたのではないのでしょうか。

些細なことですが、こういった上司（金子）の氣遣いは、部下（渡邊ら）にとつてありがたく、かつ、今以上に組織（藩）のため働こうと思わせる術なのではないかと思ひます。世の上司の方々、金子流の部下褒め術、参考にしてみたいかがでしょうか？さいごに、このたび資料画像掲載をお許しいただきました會田庄一氏に対し、この場を借りて御礼申し上げます。

公益財団法人上山城郷土資料館

学芸員 長南伸治